

ひかる石のおぼえ

「ひかる石」になりたい

2年 R・Mくん

ぼくは家にかえると、かえでくんとおなじように「きょうは学校で、どんなことがあった？」と聞かれます。お父さんとお母さんは、うれしそうに話を聞いてくれます。でも、いやなことがあって、何も話したくない時は、だまっていることもあります。そんな時、お父さんは、ぼくの大きなお魚やえいがの話をしてくれます。ぼくはいつの間にか、わらって話をしています。かえでくんのお父さんが、きょうりゅうと石の話をしてくれたのも、たのしい気もちにさせて、おはなしをしやすいようにしているのかなと思いました。

かえでくんがしゃべらなくなったのは、大きなママがしんだのがわかった日からでした。ぼくは、かえでくんほどに「大きなお魚のかたまり」ができたことはありません。少しいやなことがあっても、いつの間にかわすれています。本のとちゅうまでは、かえでくんはかわいそうだとかんじていました。でも、かえでくんとお父さんが、石とお母さんの話をしているところから、少しうらやましいなとかんじはじめました。それまでのかなしみがなくなるほどに、たのしい時間をすごしていたからです。

ぼくは、この本をよんで、学校であったことや、読んだ本のことを家で話すようになりました。ぼくの家には、ひかる石やしゃべる石のかわりに、話を聞してくれるお父さんとお母さんがいるからです。この本のことをお父さんとお母さんに話したら、今までよりも、もっと話を聞いてくれるとやくそくしてくれました。学校にも、話を聞いてくれる先生や友だちがたくさんいます。ぼくのまわりには、ぼくをたのしませてくれる人がたくさんいることに気づきました。今後は、ぼくがみんなをたのしくさせる番だと思いました。ぼくがみんなの「ひかる石」になりたいです。